

刊 定價貳圓五拾錢) (三上正利)

印度(世界地理政治大系)

淺井得一著

印度は支那と共に古くより我國と密接な交渉を保つて來た。だからその名前を聞くときに起るのは遠い異國の念ではなく、結合の親しみである。日本の國の外にあるのにはちがひないが、決して外國なる語を以て此を律し得ない所以である。

かくて支那に關して支那學がある様に、我國に於いて印度學が成立してゐないのは寧ろ怪しむべきことぞと思はれる。或は印度學は成立してゐぬなど云ふ騒ぎでないと言はれるのかも知れないが、よし存したところでそれも佛敎學の片蔭に息をこらしてゐたまゝ、一般社會の人々にまでは姿を見せようとしなかつたことも確である様に思へる。

又その反面印度に關する、殊に近代以降の印度に關する一類の著述が多く存する。殊に大東亞戰爭以後輩出したこれ等の書物は何と名付けたらよいのか、政治に關し、經濟に關し、或は歴史又は地理に係はるのではあるが、確固たる目標と方法を缺いてゐることに於て雜著と呼ぶべきものであらう。これは少し酷評であるかも知れない。

いづれにせよ、我々の印度に對する關心がもし上述の様な二つのもの以外に求めるべき據所がないとすれば、この大いなる責務

を負ふ我等の時代にとつて甚だ寒心すべきことであらう。何故ならそれ等はいづれも今日の時代と、それを生出す我祖國についての充分なる反省と理解をその方法と目標の内に示してゐないからである。

だから亦、新しい印度に關する學問が興り得る地盤と方向もそこにのみあり得る。印度に關する上述の二種の學もこゝに於て始めて新なる呼吸を始め或は又その模索は光明を仰いで相倚つて印度の解明に進むを得るであらう。

淺井氏著「印度」はまさにかくの如きものとして、日本に於る印度研究の再出發に出走を命じたものと云へるだらう。こゝに於て印度と印度人がその歴史のそれ／＼の時代に於て、又東亞或は世界に於て占める意味が、少くともその輪廓に於て明瞭に捉へ示されてゐる。輪廓とは云つたが、印度理解へのかゝる手掛りはまさ

に大いなる賞讃に價するであらう。
前編、印度の地政學的基礎、中編印度の地政學的要點、後編、印度の屈辱とそのアジアへの復歸と分たれたこの書は、一般讀者といふ對稱に見事に焦準を合せ、平明な記述と俟つて樂々と通讀せしめる。しかしかくの如くして生ずる安易さのうちに、この書の大いなる意義とこの著者の尚志を見失ふことは許されてはならぬであらう。蕪辭をつらねて江湖にその刊行を告げる所以である。(A五版二八一頁 昭和十七年七月 白揚社刊 定價貳圓)

(野間三郎)